大正大学蔵『源氏物語』の書写者と仏教

研究生　首藤　卓哉

大正大学蔵『源氏物語』（以下、大正本）は、「寄合書」で、各巻に貼付されている極札に依ると、約四十名によって書写をされている。書写者には、公家、僧、連歌師、女性と、幅広い人々で構成されている。そして、その中には、天台座主が三名も名を連ねている。梶井宮堯胤法親王（天台座主一六一世）、尊鎮法親王（同一六三世）、梶井宮應胤法親王（同一六五世）の三名である。このように、極札に書かれた人物に注目すると、大正本は天台宗と密接な関わりがありそうである。本発表では、書写者の一人である姉小路中納言基綱卿に注目し、基綱と天台宗、そして大正本との関わりへ言及した。

基綱は、嘉吉元年（一四四一年）生まれで、本姓は藤原で、姉小路昌家の息子である。基綱の家系は、代々、飛騨守の家系であり、大正本が飛騨の素封家から購入されたという経緯も、このことが関連していると思われる。

その基綱は、大正本では「夢浮橋」巻の書写を担当しており、奥書も書いている。「夢浮橋」は『源氏物語』の最後の巻であり、いわゆる巻軸に相当する巻である。「寄合書」で最終巻は書写の企画者が書くことが多いとされていることから、基綱は、大正本の書写の発起人、もしくは、それに近い中心人物であったこと想像される。よって、基綱について詳しく知るということは、大正本の書写経緯を明らかにすることで必要なことである。これが、本発表で、基綱に注目をした理由である。

基綱を語るにあたって、本発表では特に、歌集に焦点を絞った。基綱の代表的な歌集は、『卑懐集』と『基綱集』がある。

『卑懐集』は、「卑懐」の命名からみて、基綱生前の自撰歌集、あるいは打聞のための撰歌資料と考えられる。『基綱集』の詠出年次は文明一〇年（一四七八年）から明應七年（一四九八年）の二〇年間に及ぶものである。全て題詠であるが、『卑懐集』に対して、自撰か後人の編かは未詳である。

その『基綱集』には、全二二六首の歌が入集しているが、終末部に釈教歌が六首出ており、発表では、「菩薩界」「如是報」「不軽品」と題された三首を挙げ、基綱は天台教学に関して、その思想を咀嚼して和歌に詠じる程の深い理解を有していたと考えられることを示した。実際に基綱は『禁中御八講記』という、法華八講に関して非常に重要な文章を残している。なお、この『禁中御八講記』の中には、大正本の極札に書かれている書写者の名や、関係が深い人物の名が、数名、書かれている。

大正本が書写をされた当時、『源氏物語』の読解、解釈には、天台教学の知識が必須であった。それは一条兼良が著した『源氏物語』の注釈書である『花鳥余情』などから

も、明らかであろう。『花鳥余情』は、それまでの注釈書とは一線を画し、『源氏物語』を解釈する上で、方便品などの天台教学を引用して解釈しているのである。なお、この兼良の息子である冬良は大正本の「末摘花」巻の書写者である。

このようなことから、基綱が大正本の書写を、天台宗の僧門関係者に依頼するのは、自然なことではないであろうか。

以上のように、基綱が持つ天台教学の知識の深さと大正本の書写者の関係性を論じた。